

人々が交差し、それぞれの歩みを進めるための
ひきこもりにまつわる合流分岐点

令和2年度厚生労働省社会福祉推進事業
ひきこもり当事者やその家族と
支援領域のプラットフォーム

JUNCTION

「ジャンクション」

整備・構築に関する調査研究事業
報告書

本事業を行う「ひきこもりUX会議」とは

「ひきこもりUX会議」は、不登校、ひきこもり、発達障がい、性的マイノリティの当事者・経験者らで立ち上げた、「生存戦略」の提案・発信を続けるクリエイティブチームです。

生きづらさを通じて、得たもの、失ったもの。それを発信し、誰かと共有し、フラットなつながりをひろげ、しなやかに、おだやかに生き抜いていく方法を提案したい。既成のシステムになじまない人をお仕着せの「ふつう」へと変えようとするのではなく、また「就労」や「自立」へと性急に駆り立てるのではなく、あなたやわたしたちが「ほんとうに大切にしたいかったもの」を見つけたい。

そんな思いのもと、風上から風下への「支援」とは一線を画したさまざまなイベント、調査、制作物やメディアを通じて、「UX=固有の体験*」を出会い、発信・表現し、一人ひとりが自分の人生を自分でデザインできる社会を目指して活動しています。



ユニーク・エクスペリエンス * UX=Unique eXperienceとは？

ひきこもりをはじめ、人とかかわる困難さ、居場所のなさ、“ふつう”や“こうあるべき”と違うこと——さまざまな背景に起因する「生きづらさ」。わたしたちはそのすべてを「Unique eXperience = 固有の体験」と捉えています。

個人の「UX」は、他者と共有しあうことでこれまでとはちがった価値を帯び、本人や誰かの生き方をポジティブに変えたり、こわばっていた思いや考え方をやさしく氷解させてくれる、そんな可能性に満ちたものです。“支援”を考える際にも、そのUX、つまり当事者の声に耳を傾け、それを“資源”として活かしていくことが重要であると考えます。本事業においても、「一人ひとりのUXを持ち寄り」ことは最も大切なコンセプトとなっています。

ごあいさつ

「ひきこもり」が社会課題として認識されて20年以上が経ちます。この間、ひきこもり支援は主に就労支援に特化され行われてきました。一方で、支援に対する課題も明らかになってきています。たとえば、当事者やその家族の中には、「役所に行くと思われないのではないか」「相談窓口がどこかわからない」「自分のような人間が相談していいのかわからない」という不安から、支援につながれない人も少なくありません。いわゆる「ひきこもり問題」を家族だけで抱え、家族の中だけで解決しようとしても行き詰まってしまうことも多く、当事者やその家族が、地域で孤立することなく気軽に「助けて」といえる状況をつくりだすことが急務だと私たちは考えます。

ひきこもりUX会議は、不登校やひきこもり等の当事者・経験者らによって立ち上がり、その当事者性を活かした活動を続けてきました。団体名の「UX」は、「ユニーク・エクスペリエンスUnique eXperience=固有の体験」という意味です。ひきこもり当事者の中にも、ご家族や支援職の方の中にも等しく「UX」があります。そこに「立場」による「優劣」はありません。こうした一人ひとりの「UX」を用いながら出会い、対話を重ねることで、ひきこもりのみならず、多様な人々が「生きやすい社会」につながると信じています。

本事業では、行政と民間がイベント作りを軸にネットワークを形成することで、相談窓口だけではなく、新たな支援や関係性につながる出会いの創出を心がけました。こうした取り組みを繰り返していくことで、地域の中に有機的なネットワークが生まれ、「つながりやすい支援への入口」が構築されていくことを期待しています。

本書はこれまで私たちが活動の中で培ってきた、「UX」を活用した当事者主体の場づくりのノウハウをオープンソース化し、より広く、さまざまな自治体や団体に活用してもらいたいとの思いでまとめました。

本書をきっかけに、共によりよい支援のかたちを模索し、作り出していく契機となれば幸いです。

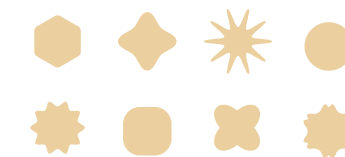


一般社団法人ひきこもりUX会議
共同代表理事 恩田 夏絵

本報告書の使い方

本事業(令和2年度厚生労働省社会福祉推進事業「ひきこもり当事者やその家族と支援領域のプラットフォーム「Junction」整備・構築に関する調査研究事業」)は、ひきこもり等の生きづらさを抱える当事者とその家族が、地域の支援機関の存在を知り、つながるために、どのようなアプローチができるか調査・研究する目的で実施しました。家庭でもなく相談窓口でもない「場」を企画することを軸に置いた本事業について、本報告書ではその狙いと現場でのノウハウをできるだけ具体的に記載するよう心がけました。また、事業に関わったさまざまな立場の方からの声や、当事者の視点・思いを丁寧に記載しています。

ひきこもりについて「何から着手すれば良いだろう」「当事者のニーズがわからない」と悩む、ひきこもり支援に携わる方や、ひきこもりに関する理解を深めたいという方にとって、実践的な手引きとしてご活用いただけたら幸いです。



目次 Contents

- 2 ごあいさつ／本報告書の使い方
- 3 本事業を行う「ひきこもりUX会議」とは？
- 4 目次

第4章 chapter4

- 46 事業のプロセス
—自治体ごとの状況と歩み—
- 47 Case1：東京都東久留米市
- 53 Case2：大阪府阪南市
- 59 Case3：群馬県安中市
- 65 Case4：香川県高松市
- 71 Case5：香川県多度津町／まんのう町

第5章 chapter5

- 77 当事者理解を深めるために
- 78 林恭子のひきこもり経験
—研修会での講演から—
- 80 UXラウンジ参加者の声
- 84 UX会議事業担当チーム座談会

第6章 chapter6

- 87 地域の中でひきこもり支援の
プラットフォームをつくるには？
- 88 地域プラットフォームづくりの7ステップ
- 92 地域プラットフォームづくりの3つのポイント

- 98 成果と課題
- 99 巻末資料

第1章 chapter1

- 6 事業の全体像
- 7 事業目的・コンセプト
- 8 事業の背景
- 10 事業の構造・全体像
- 12 事業実施スケジュール(当初案)
- 14 実施自治体の基礎情報

第2章 chapter2

- 20 「ひきこもり」をとらえなおす
—研修会「当事者と
デザインする支援とは」—
- 21 研修会で伝えたこと
- 30 研修会開催レポート・実施概要
- 32 参加者の声
- 34 運営側の感想

第3章 chapter3

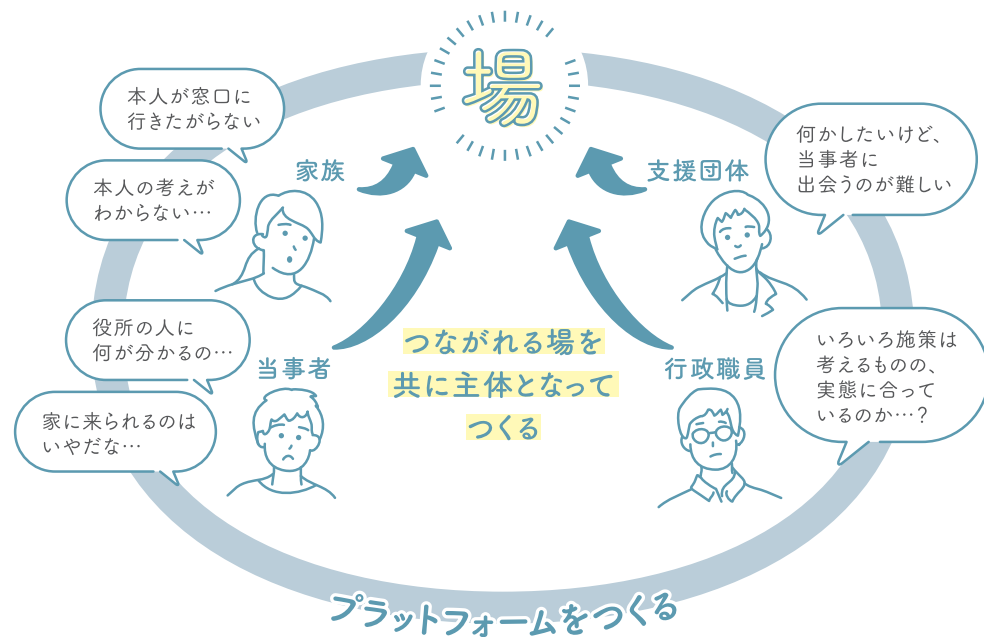
- 35 出会い・対話・交流の場をつくる
—イベント「ひきこもりUXラウンジ」—
- 36 ひきこもりUXラウンジとは？
- 38 第1部：オープニング、当事者体験談
- 40 第2部：対話交流セッション
- 42 第3部：クロージング
- 44 運営側の感想

本報告書で、アンケートから引用している感想等は、回答者の承諾を得たもののみ掲載していますが、表記ブレや誤字等の修正や、文意が通りにくい箇所の補足などを行っている場合があります。また、プライバシー保護のため一部を伏せ字としたり紙幅の都合上省略して記載している場合があります。

本報告書内で使用している写真は本人が承諾している場合を除き、イベント参加者等のプライバシー保護のためデータを加工して掲載しています。

事業目的・コンセプト

行政による現在のひきこもり支援は、ほとんどが「役所(相談窓口)」や「家(アウトリーチ)」が支援の主な入口になっています。しかし、当事者や家族が支援とつながるまでには、情報不足や、心理的なハードル、受援条件などの課題があります。そこで、“役所”や“家”ではないところで、当事者や家族と支援者が相互につながる場「支援領域*と受援者の Junction(交差点・合流地点)」をつくるモデル事業を構想しました。*本事業における「支援領域」とは、ひきこもりや生きづらさに関する支援に携わる行政担当課/職員および民間支援団体を指します。



「場」が持っている力

ひきこもりUX会議は、これまで一貫して「ひきこもりや生きづらさ」を軸にしたさまざまな「場」を企画してきました。「まず集まって話しましょう」という場を開き、フラットな対話を通じた心地よい関係を築くことが、参加者の安心と共感につながり、時には次の一步を後押しする。対話交流の場には、そんな力があります。

本事業でも、ひきこもりや生きづらさを抱える当事者同士、ご家族同士、関係者同士がまずはリラックスして出会い、対話や交流をはじめるイベントを事業の核として位置づけています。

本事業は、厚生労働省「令和2年度社会福祉推進事業」(以下社会福祉推進事業)として実施した。社会福祉推進事業は、地域社会における今日的課題に対する調査研究や先駆的・試行的取組等に対する支援を通じて、社会福祉の発展、改善等に寄与することを目的として実施される。

共に主体となって場をつくる意味

本事業におけるイベントの現場運営には、ひきこもりUX会議だけでなく、行政職員、民間支援団体や社会福祉協議会のスタッフなど、事業に参画する団体のメンバーが関わりました。プラットフォームのメンバーが運営に携わり、会場で参加者と出会うことで、顔の見える関係を築くことを目指しました。



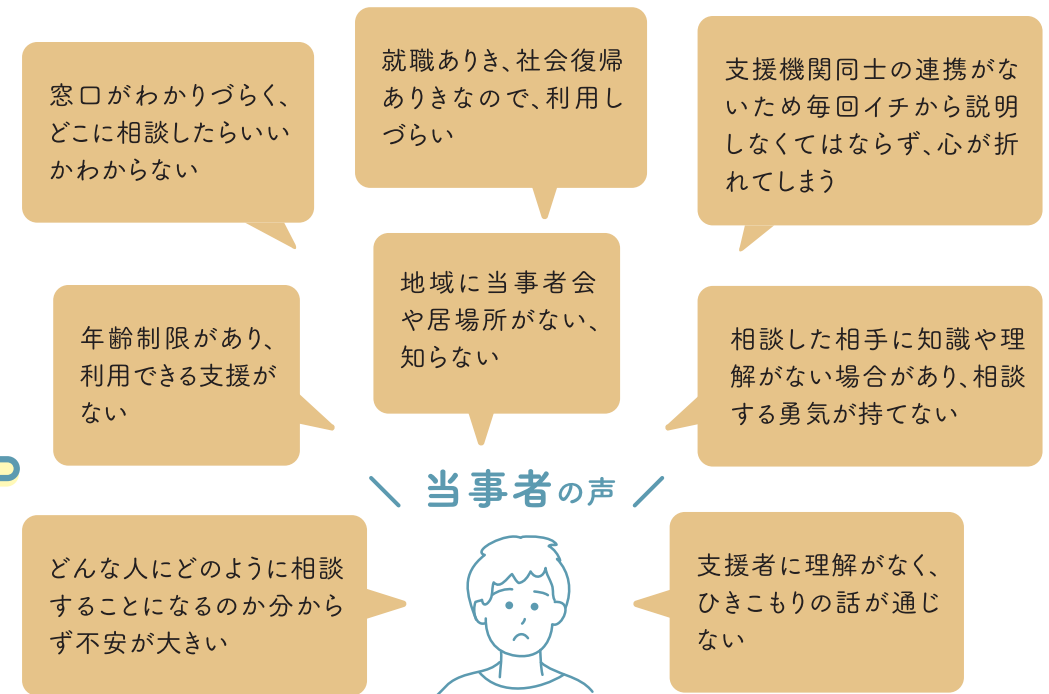
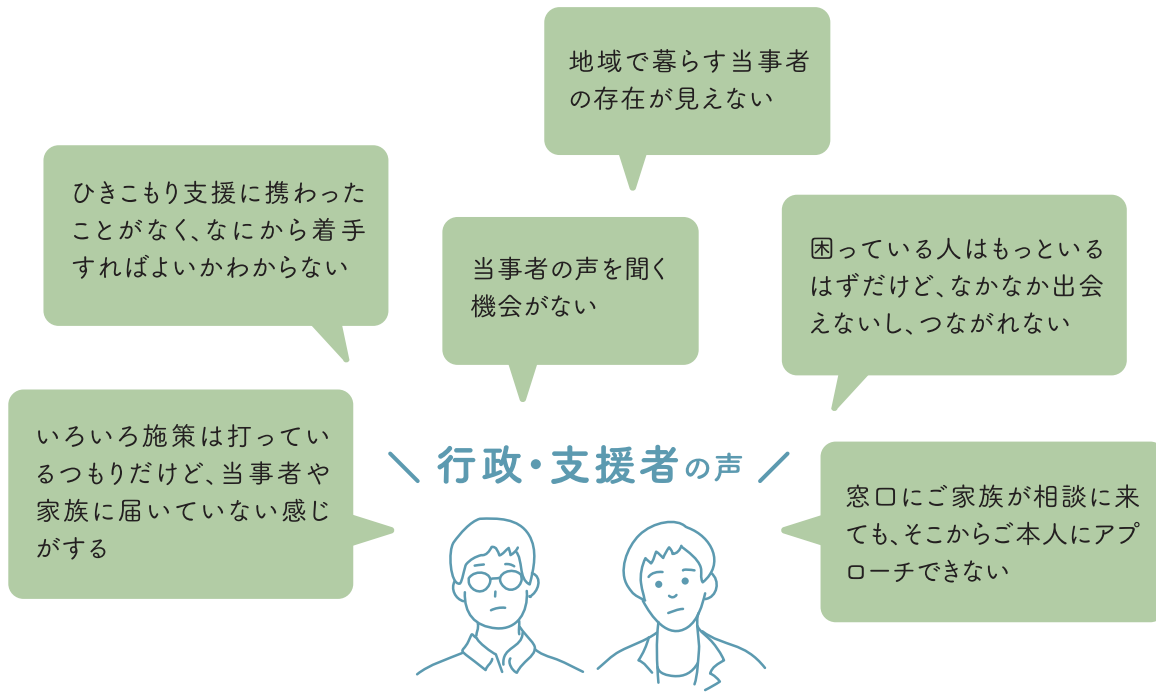
第1章 chapter1

事業の全体像

群馬県、東京都、大阪府、香川県において、2つの広域自治体、6つの基礎自治体および地域の関係団体と協働で、支援者・当事者・家族のさまざまな立場からなるネットワークを形成し、ひきこもり当事者やその家族が支援領域とつながれる「場」づくりに取り組みました。

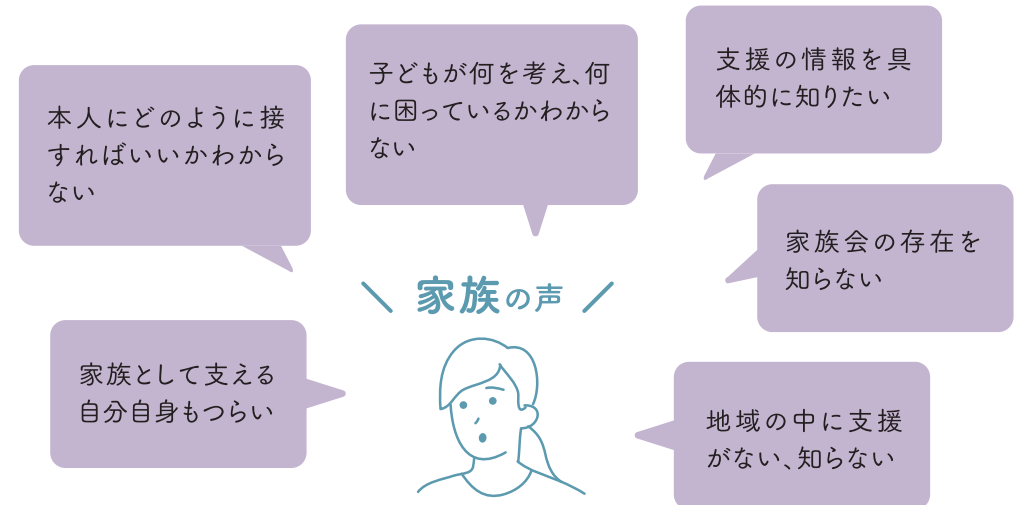
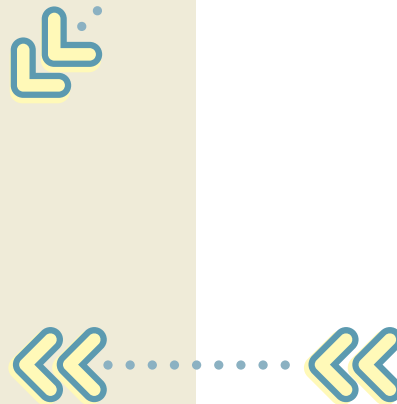
事業の背景

ひきこもりUX会議(以下、UX会議)では、これまで「ひきこもりUX女子会」をはじめとした当事者会やイベント、実態調査を通して、ひきこもり経験や生きづらさのある方たちからひきこもり支援に関する声を聞いてきました。一方、自治体や支援団体に働く職員からも、支援現場の困りごとを耳にしてきました。



Junction(交差点・合流分岐点)の必要性

それぞれの立場の声から、支援や居場所等につながる上で、情報の伝達方法のミスマッチや支援機関への心理的なハードル、それに起因する当事者や家族の孤立がわかってきました。そこで、行政・民間支援団体・家族会や当事者会など、さまざまな立場の人が連携するプラットフォームづくりを進める必要があると考えます。



事業の構造・全体像

Aグループ 基礎委員会

本事業の実務を進めるグループです。対面での打ち合わせだけでなく、オンライン会議ツールも活用して細かに打ち合わせを重ねました。

主な構成者	<ul style="list-style-type: none"> ●UX会議 ●自治体のひきこもり支援担当課
役割	<ul style="list-style-type: none"> ●事業スケジュールの共有、進行 ●会場の確保、各種手続き ●B/Cグループとの連絡、調整 ●自治体内および近隣自治体への広報戦略の立案 ●役所内での本事業の情報共有、参加促進 ●イベントの申込・問い合わせ窓口 ●イベント開催時の運営、管理 など

本事業では、「場づくり(イベントづくり)」のプロセスに、行政職員・民間の支援団体、ひきこもり家族会や、ひきこもり当事者・経験者など、さまざまな立場の人が参画することを重視しました。場づくりのプロセスを共有することによって、関係性が構築され、相互理解を深め、イベント終了後にも地域にネットワークが残っていくことを目指します。

※この図は、当初構想したイメージであり、実際は自治体ごとの実情に合わせる体制を取りました。

Bグループ 事業連絡委員会

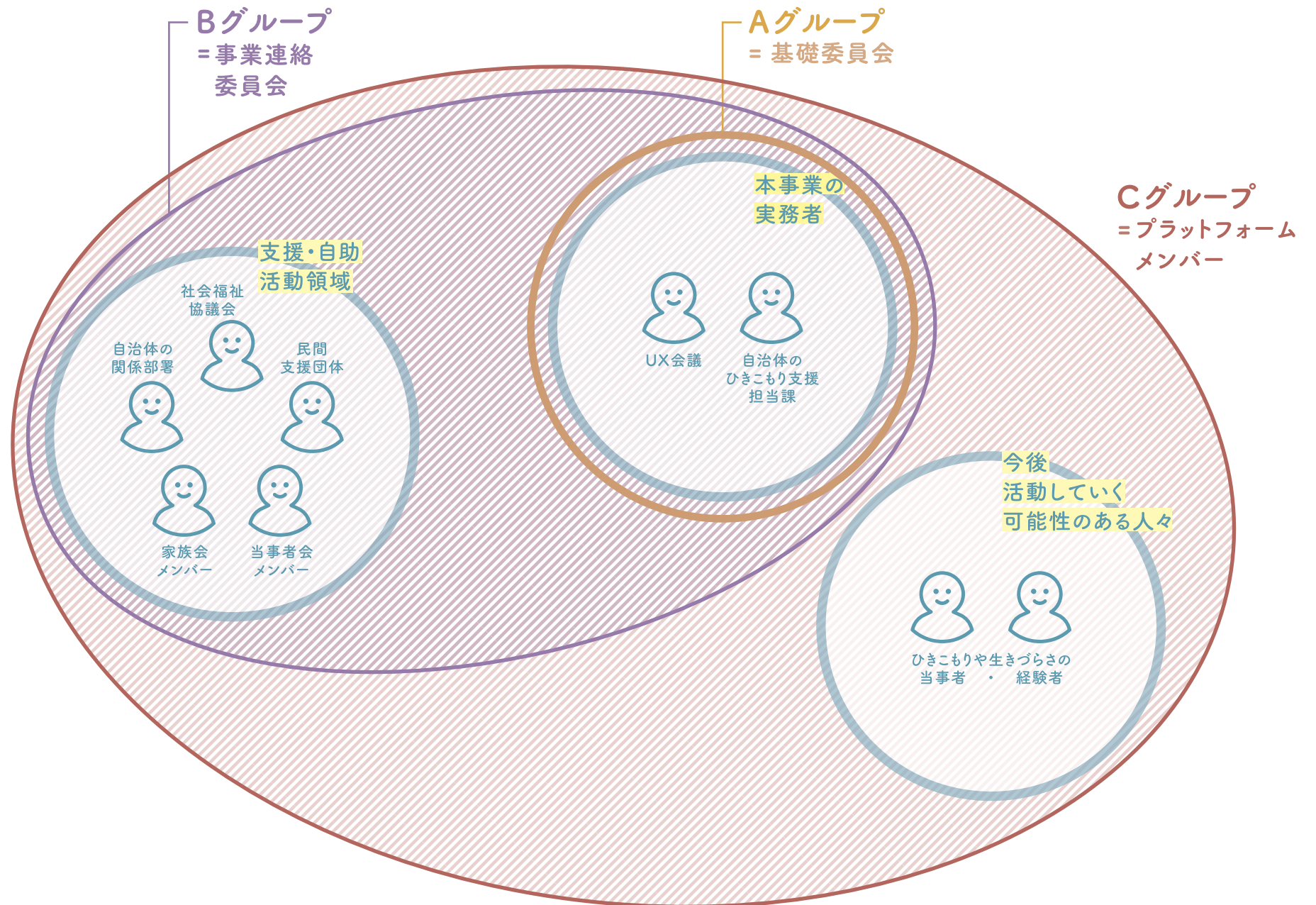
実施自治体の中でひきこもりの関連活動に取り組む団体やグループへ参画を呼びかけました。主に研修会やイベントの前後に集まる場を設けました。

主な構成者	<ul style="list-style-type: none"> ●Aグループメンバー ●自治体の関係部署 ●社会福祉協議会 ●民間支援団体 ●家族会や当事者会のメンバー
役割	<ul style="list-style-type: none"> ●プラットフォームづくりに向け、共に考えたりアイデアを出しながら意見交換する場への参加 ●地域の社会資源に関する情報提供、意見出し ●イベント等の広報協力 ●イベント開催時の運営協力 など

Cグループ プラットフォームメンバー

Bグループメンバーのつながりや、プレ交流会で集まった当事者に声を掛けました。

主な構成者	<ul style="list-style-type: none"> ●A/Bグループメンバー ●地域の居場所や当事者会運営に関心があるひきこもりや生きづらさの当事者/経験者
役割	<ul style="list-style-type: none"> ●イベント開催後の振り返り会への参加、意見出し ●イベント当日の運営サポート、体験談のスピーカー など



事業実施スケジュール(当初案)

本事業では、UX会議と実施自治体の協働のもと、大きく3つのイベントの開催を目指しました。また、企画プロセスに各地域の支援領域の関係者や当事者、家族が参画することも重視し、打ち合わせの場やイベント当日には、情報共有・関係構築を図りました。

※このスケジュールは当初案であり、実際の動きは第4章を参照してください。

プレ交流会

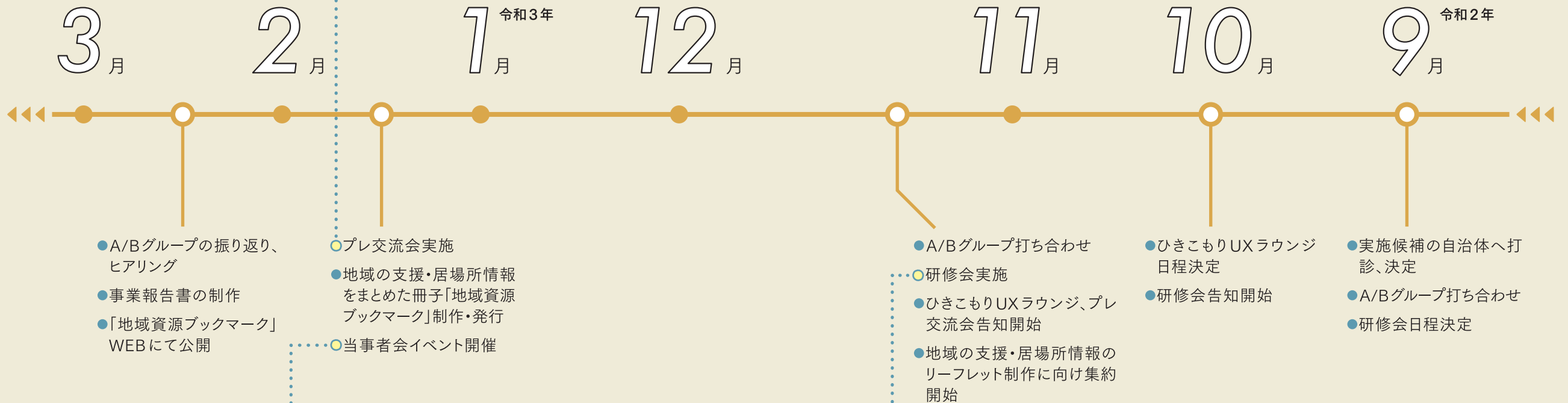
UXラウンジの事前交流会という位置づけで小規模に実施。ひきこもりや生きづらさの当事者・経験者を対象に、「まずは集まってみましょう」と呼びかけた。この会に参加した人の中から、UXラウンジで体験談のスピーカーを依頼することもあった。

研修会

主にひきこもり支援に携わる人およびA/Bグループメンバーを対象に実施。ひきこもりUX会議の活動現場での経験や、実態調査で集まった当事者の声を紹介しながら、「ひきこもり」への理解とまなざしをアップデートし、支援現場に活かしてもらうことを目的とした。

ひきこもりUXラウンジ

ひきこもりや生きづらさの当事者・経験者同士、ご家族同士、関係者同士が出会い、対話や交流をはじめるためのイベント。内容は2部構成にし、第1部は誰でも参加できる「ひきこもり・生きづらさ経験者の体験談」、第2部は参加条件を絞った「対話交流セッション」の分科会とした。



大阪府 阪南市



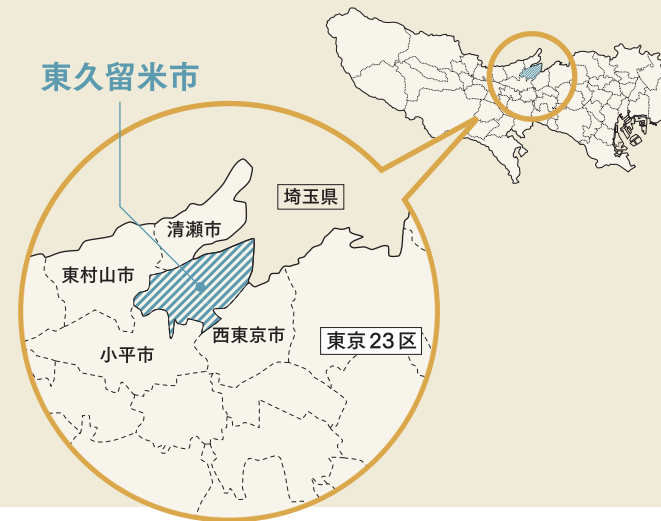
基礎情報

位置 大阪府の最南部、泉南地域に位置する。

人口 54,100人
(令和2年12月末現在)

本事業担当課 福祉部市民福祉課

東京都 東久留米市



基礎情報

位置 東京都の多摩地域東部に位置し、東村山市、清瀬市、埼玉県新座市などと隣接。

人口 116,951人
(令和2年12月末現在)

本事業担当課 福祉保健部
福祉総務課

取り組んでいること

平成12年に、公民協働により「地域福祉推進計画」を策定し、「市民みんなの基本的人権を大切にするまちづくり」に取り組んできた。

厚生労働省モデル事業として、地域力強化推進事業(平成29年10月～)、多機関の協働による包括的支援体制構築事業(平成30年4月～)を実施。平成30年7月には、ひきこもり支援など、制度の狭間にある相談を受けとめる場として、市役所福祉部に「くらし丸ごと相談室」を開設するとともに、阪南市立尾崎公民館、社会福祉法人日本ヘレンケラー財団・地域活動支援センターまつのき園との共催により「ひきこもり支援実践講座」を開催。令和元年11月から、講座受講者・元当事者・家族・支援機関により、「ひきこもり支援・草の根ネットワーク」を結成し、月1回情報交換や学習会を開催している。

「ひきこもり」の現状

コミュニティソーシャルワーカーや地域包括支援センター、ひきこもり支援NPOなど関係機関に寄せられる相談を通じて実情を把握している。令和3年度に、関係機関等との連携により、ひきこもり支援に関する調査を実施予定。

内閣府の「生活状況に関する調査」(平成27年度・平成30年度)に基づき、本市の15歳から64歳までの人口(令和2年12月末現在、住民基本台帳人口)から、ひきこもり状態にある方の人数を推計すると、447人となる。

現状の課題

- 市として「ひきこもり状態」にある方、また家族の実情を把握すること
- 本人、家族が相談しやすい相談体制の充実(医療機関との連携)
- 本人、家族が主役となる居場所づくり
- 「ひきこもり支援」の理解のための講座の継続した開催(ひきこもり支援サポーターの養成)
- 元当事者、家族による支援(ピアカウンセリング)の実施

取り組んでいること

ひきこもり支援に限らず、生活困窮者自立相談支援事業は、関係機関との連携が重要であり、当事者の方が相談につながりやすい環境づくり・支援先との関係づくりに注力している(市役所の他部署・庁舎外の関係機関への事業周知。課題を抱えた世帯・個人への事業利用を奨励等)。

すぐに就労することが難しい方向けに、社会福祉協議会や社会福祉法人等の事業として、ボランティアや就労の訓練の場を提供。また商工会の地域人材育成支援事業では、ひきこもり経験者の就業支援が行われている。

令和2年度には、社会福祉協議会の地域福祉コーディネーター事業の一環として、家族会の立ち上げに向けた活動が開始。ここでは地域で居場所づくりを行っている市民や法人もアドバイザー的な役割を担っており、今後当事者が悩みや思いを共有できる場として、重要な位置づけになっていくと予想される。

「ひきこもり」の現状

統計的な調査結果はないが、平成27年4月にスタートした「生活困窮者自立相談支援事業」の中で、徐々にひきこもりに関する相談が増えている。10代～8050問題の世代まで年齢層は幅広く、ご家族や周囲の支援者から相談につながるケースが多い。家の外での居場所やボランティア・就労訓練等につながるケースは少なく、多くは把握から具体的な支援につながるまで数か月を要する。

現状の課題

地域での居場所や相談先は徐々に整備されている過程にある。当事者やご家族等が、どんな支援が受けられるか包括的に相談できる機関(窓口)の整備が喫緊の課題。市内にはまだ多くのひきこもりの方がいる可能性があり、積極的に地域に出て、対象者の方の把握や支援のニーズを吸い上げることが重要と考えている。

実施自治体の基礎情報

群馬県安中市

基礎情報

位置 群馬県の西部に位置する。高崎市、富岡市、長野県軽井沢町と隣接。

人口 56,706人
(令和2年12月末現在)

本事業担当課 福祉課社会福祉係



基礎情報

位置 四国の北東部に位置。中核市の高松を含め17市町からなる。

人口 949,358人
(令和2年9月1日現在)

本事業担当課 健康福祉部障害福祉課

香川県

「ひきこもり」の現状

平成30年度に県内の民生委員・児童委員を対象にアンケートによる実態調査を実施し、県内でひきこもり状態にある方は少なくとも726人いることが分かった。しかし、「担当地域にひきこもり状態の人がいるか分からない」という回答も多く、正確な実数はつかめていない。調査結果から、ひきこもり期間は約半数が5年以上、2割が20年以上ひきこもっており、また半数以上が40歳以上と、ひきこもりの長期化・高齢化の傾向が見られた。また、4割が支援を受けていない状態であった。支援で困っていることとして「関わりを拒否された」、「関わり方が分からない」等の意見も多かった。偏見や世間体を気にする風潮を危惧している。相談窓口への相談件数も徐々に増加しているものの、少なく、また、本人と家族のニーズのずれや、すぐに結果が出ない現状などから相談が途切れがちなこと、家庭の孤立や8050問題も喫緊の課題である。

取り組んでいること

- 精神保健福祉センターに設置したひきこもり地域支援センター「アンダンテ」や保健所を中心として、各市町や社協等と連携して、当事者や家族からの相談に応じるとともに、支援情報の発信や普及啓発、ひきこもり相談支援に携わる支援者を対象とした研修会を開催。
- 早く相談窓口につながるよう「家族のためのひきこもり支援ブック」や相談窓口のチラシを作成・周知。
- 平成26年度から当事者・家族のピアサポート及び伴走型支援などきめ細やかな支援を行うひきこもりサポーターの育成(民間委託)とサポーター活用(令和2年4月時点登録者64名)
- 令和2年度より保護者から本人への効果的なアプローチ、家族支援の充実を図るため、ペアレントプログラムを民間委託にて実施。
- 令和2年度より中高年にも配慮した居場所づくりのモデル事業として交流・社会参加・体験のできる居場所を県内3か所で実施。

現状の課題

- 相談支援体制の充実
身近なところでタイムリーかつ本人・家族に寄り添った継続した支援ができるように各保健所がバックアップし、相談員の対応力向上をはかる。令和3年度以降、市町のアウトリーチ支援に力を入れたい。
- ひきこもりサポーターの人材発掘・育成(個別支援のできるピア)と活動の場の広がり。
- 身近な地域住民にひきこもりの正しい理解と、早く相談につながるための効果的な情報発信。
- 身近な地域に安心できる居場所ができる。
- 家族へ共感的・支持的アプローチを行うと同時に、本人の状態を受け入れ、効果的なかかわりがもてるよう継続したサポートを行う。また、家族同士がつながり、家族が元気になることをめざした交流の場など家族支援の充実。
- 教育機関と連携し、早期に継続したかかわりが持てるような仕組み。

取り組んでいること

- 平成26年度より「ひきこもり支援講演会」を開催。(関心を高め、ひきこもりへの理解者を増やすことが目的)
- 平成28年度より「未就労の若者の就職を考える保護者セミナー」を開催。(内容は、若者を取り巻く就活・雇用状況やひきこもり当事者との日常生活での関わり方などの学習・意見交換など)
- 平成28年7月より行政機関、民間の支援団体をメンバーとして「ひきこもり支援関係者連絡会」を立ち上げ。
- 令和元年度より、生活習慣形成のための指導やパソコン教室等、一般就労に向けた基礎能力を身につけることを目的に「就労準備支援事業」を行っている。(医療法人に委託)
- 令和2年12月より「ひきこもり家族教室」をスタート。(家族がひきこもりの知識や情報、対応などを学び、自身の不安をやわらげることが目的)

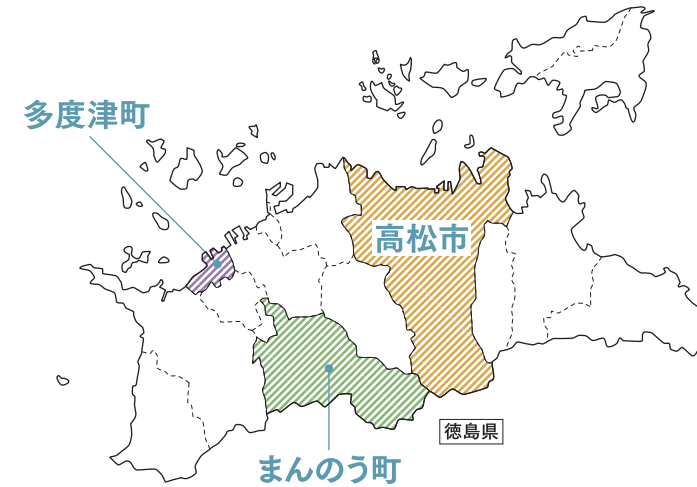
「ひきこもり」の現状

平成28年にひきこもり状態の方の人数について、民生委員による調査を実施したが、正確な人数は把握できていない。ひきこもりについての認識不足や世間体を気にする家庭が多いためか、相談件数も少ない。相談に来られた家族からは、「一日でも早く何とか仕事をしてほしい」との就労相談が多く、ひきこもり当事者の気持ちに寄り添った家庭での支援が必要と思われる。

現状の課題

令和3年1月に本事業内で「ひきこもり当事者会」を市として初めて開催。SNSで開催を知り、県外から参加された当事者も。会終了後には当事者同士で連絡先の交換が行われており、人とつながる場の必要性を感じた。現在、ひきこもり当事者が集える居場所が確保できておらず、今後は、建物を探し、当事者が自分の意志で自分の時間を使い、当事者同士で話ができる場所の運営を検討したい。

実施自治体の基礎情報



取り組んでいること

令和元年度、行政機関やひきこもり支援に実績や興味関心のある民間事業者等が集まり、現状や課題について意見交換を行った。令和2年度より「多度津町ひきこもりサポート会議」を開催し、町内外の関係機関とひきこもり支援に関する情報・意見交換を定期的を実施。広く一般に啓発を行うとともに、支援に携わる者のスキルアップのための研修を実施している。

現状の課題

- ひきこもり状態にある人の人数や状況について正確な実態把握ができていない。
- 多様なニーズに対応できる人材育成や、支援者側のコーディネートやサポート方法等のスキルアップが必要。(本人の意思や状態・家族の思いの汲み取り・課題に対応するサービスの紹介など、色々な要素が複雑に絡み合うため)
- 身近に気軽に行ける支援機関や、当事者会など資源が少ない。

取り組んでいること

平成28年9月より、まんのう町ひきこもりサポーター派遣事業を開始。利用希望があり、サポーター派遣ができていたのは現在1ケース(2年間継続している)。生活困窮や介護、障害特性などさまざまな困難から相談につながって、ひきこもりという状態が把握されることが多く、社会福祉協議会や高齢者の地域包括支援センター、障害者生活支援センターなど他機関と、小規模自治体ならではの、顔の見える関係で連携、支援が行えている。

現状の課題

ひきこもりの当事者が集まることのできる居場所が町内にあればよいのではと思う。ひきこもり経験のある方より、農業を通じた居場所事業等、支援に携わっていきたくないと申し出があり、その方の負担の少ないかたちで実現するためにはどう取り組んでいけばよいか、模索中である。

香川県 多度津町

基礎情報

位置 香川県仲多度郡に属する町。古くから海上・陸上交通の要所として栄える。

人口 23,056人(令和2年12月末現在)

本事業担当課 健康福祉課

「ひきこもり」の現状

町の窓口には年間に数件の相談がある。10代から50代と幅広く、家族や介護関係の事業所からの相談が多い。ひきこもりについて関心を持っている地域住民や事業所の方がいる一方で、正しい理解や認識が広く浸透しているとはいえない。当事者や家族が世間体を気にしてしまうために、状態が潜在化しやすく、問題も内在化しやすい傾向にあると思われる。そのため、相談件数と実態には乖離がある印象。

香川県 まんのう町

基礎情報

位置 香川県仲多度郡に属する町。南部には讃岐山脈が連なり、北部に讃岐平野が広がる。

人口 18,215人(令和3年2月1日現在)

本事業担当課 健康増進課

「ひきこもり」の現状

平成30年に、香川県によるひきこもりに関するアンケート調査を実施したものの、正確な人数の把握はできていない。町内の高齢化率は37.0%(令和3年2月1日現在)と高齢化が顕著な町であることから、8050問題とされるケースが散見され、担当のケアマネージャーや保健師が家族支援として関わっている。

ひきこもりの方への関わりとしては、民生委員やスクールソーシャルワーカーからの相談を受け数年継続支援をしているケースや、保護者から相談を受けているケース、こころの健康相談でひきこもりの状況があきらかになるケースなどがあるが、個別の対応に終始しているのが現状である。

取り組んでいること

- 健康づくり推進課では、平成27年から「ひきこもりサポーター派遣事業」を開始、平成28年から「ひきこもり相談窓口」設置(KHJ香川県オリーブの会に委託)、平成29年から「ひきこもり当事者傾聴サロン」設置(KHJ香川県オリーブの会に委託)。いずれの事業も、ひきこもりサポーターが従事している。
- 香川県の実態調査を踏まえ、健康福祉総務課地域共生社会推進室と協力し、市内の相談を希望する家庭に家庭訪問を実施。
- 健康福祉総務課地域共生社会推進室では平成29年度から「若者支援協議会」を設置。各機関と連携し、ひきこもりを含めた若者支援に関する協議の場としている。

現状の課題

ひきこもりの相談内容は、経済的なこと、就労、家族との関係、疾患などさまざま。相談できる窓口も、相談内容や本人の年齢によってさまざまであり、庁内での横の連携が課題。また、市民の方に分かりやすい相談窓口の周知方法の検討が必要である。

中高年のひきこもり支援では、若者に比べ、提供できるサービスが少ない。また、親も高齢になり、本人への働きかけが負担となることがあるため、行き詰まりを感じる人が多い。本人、家族に寄り添う支援ができるよう職員の資質向上などの人材育成をはじめとする支援体制の整備が必要。

香川県 高松市

基礎情報

位置 県の中部に位置する中核市。

人口 417,827人
(令和2年12月末現在)

本事業担当課 健康福祉局保健所
健康づくり推進課

「ひきこもり」の現状

- 平成30年度、香川県が実施した「ひきこもりに関する実態調査」では、高松地域でひきこもりの状態にある方は237人という結果であった。
- 健康づくり推進課でのひきこもりに関する相談受付件数は、平成26年度と比較すると、令和元年度は約3倍に。
- 相談者は、10代から20代の若い世代と、40代から50代の中高年世代が多い印象である。